

僧とも僧伽とも寫したと同様に、蒙度讚の僧も至元安樂經の僧伽も同一の *Saṅgha* に對せしめたものと見て然るべきである。更に後の考に俟つこととする。

要するに此の經はメシヤがシモン・ペテロの間に對して安樂道を説いた次第を述べたものであるが、蒙度讚の末に附した景教經目の跋に據ると、前にも述べた如く此の經は景教の大德僧景淨が譯出した景典三十部中の一つに數へられてゐる。跋の全文は

謹案諸經目錄、大秦本教經都五百卅部、並是貝葉梵音、唐太宗皇帝貞觀九年、西域太德僧阿羅本屆于中夏、並奏上本音、房玄齡・魏徵宣譯奏言、後召本教大德僧景淨、譯得已上卅部、卷餘大數具在貝皮夾、猶未翻譯。

と記され、そうして志玄安樂經の名は經目中の第三に載せられて居るのである。果して此の跋據るべしとすれば、此の經は勿論本來梵音即ち或る西土の語で書かれた原典五百三十部中の一つから景淨が譯出したもので、其の内容はまた本來西土のネストリウス教に於て説かれて居つたものであるべきことは言を須ひない。併しながらこの跋文に従つてかゝる見解を取ることが、果して此の經の説く所と考へ合せて當を得たものであらうか。今少しく此の點について考察を加へなければならぬ。

元來此の時代に於るネストリウス派の基督教が如何なる經典を有して居つたものであるかに就いて知る所の乏しい自分は、實は此の如き問題を攷究するには甚だ不適當であることを遺憾とせざるを得ない。従つて此の經典其の儘の原典の有無を正面から論證することは、敢てこゝに試みようとする所ではないが、然も景淨の譯に成るといふ